

サウナで人類学する―「ととのう」とは何か?―

上間南生

キーワード：サウナ・ととのう・意識変容・エージェンシー論・つながり

要旨

本稿は、サウナセッションにおいて体験される「ととのう」とはなにか？それが我々の生きる現代社会でどのように作用しているのか？の二つの研究設問を明らかにしていくために、吉田の風呂論、ワイルの意識変容論、ジェルのエージェンシー論を理論的な分析枠組みとし、各地の温浴施設や屋外サウナイベントにおけるフィールドワークで観察された、サウナを巡る様々な人間模様が、一般的に知られる「ととのう」よりも、大きな意味での「ととのう」を形成しているのではないかという論述を展開している。2章において、本稿における「サウナ」とは何を指しているのかという問いに対して、それが言語学的には「ストーブ」の意味をもっていたという解とともに、フィンランドと日本の沐浴文化や、日本に流入するサウナの歴史を概観することで、現在のサウナが置かれている文脈を理解する。同様に、キーワードである「ととのう」についてもその語彙について確認し、「ととのう」について、それがサウナの文脈で使用されるようになった経緯、これまでの歴史的な記述、医学的特質という観点から紐解いていくことで、本稿で明らかにしていく「ととのう」の位置づけがこれらとは違った場所にあることを確認する。そして、本稿で定義する狭義の「ととのう」に関して、吉田（1995）の先行研究から、風呂が意識変容を引き起こす手段であるという可能性について、アメリカン・インディアン部族のスー族の儀礼とエスキモーの風呂を例に挙げ、そこで行われる熱気・蒸気浴が意識変容を促すきっかけとなることを説明することによって検討する。加えて、意識についての研究者であるワイル（1977）が論じた、ストレート思考とストーンド思考について概観し、意識変容を理論レベルで確認することで、本稿におけるサウナセッションによる「ととのう」について説明しきれない部分を指摘し、7章のフィールドワークへとつなげる。フィールドワークで観察された「ととのう」の意識変容以外の側面をジェルのエージェンシー論を援用しながら説明を試み、サウナを巡るコミュニケーションや、狭義の「ととのう」に至るまでの様々なエージェンシーに意識を向けることで得られる幸福感を広義の「ととのう」と新たに定義する。そしてその共通認識をもった人達同士が繋がっていく様子をサウナの一つのエージェンシーとし、サウナが現代社会における我々の生き方の一つを示す様子を描き出している。